

## 審査論文要旨（日本文）

論文提出者氏名： 大村 涼子

### 審査論文

題名： Feasibility of Secondary debulking surgery for recurrent ovarian cancer  
(再発卵巣癌に対する SDS の可能性に関する検討)

著者： Ryoko Omura, Fumitoshi Terauchi, Yasukazu Sagawa, Keiichi Isaka

掲載誌： The Journal of Tokyo Medical University (in press, 2017)

(審査論文要旨：日本語論文の場合 1,000 字以内・英語論文の場合 500 words)

### 【目的】

再発卵巣癌は化学療法が主たる治療法であるが、腫瘍摘出が可能な症例では secondary debulking surgery (SDS) が予後を改善する可能性があり、選択肢の一つとなってきた。過去の報告の中で、手術完遂度その中でも特に complete surgery が予後と相関するという報告は多いが、完全摘出可能だった症例が全て長期生存を望めるわけではない。本研究の目的は、再発卵巣癌に対し、摘出個数や摘出臓器などを限定せず完全摘出を目指し積極的に手術を行うことで、SDS の適応について後方視的に検討することである。

### 【方法】

2005 年 2 月～2014 年 7 月に当院で再発卵巣癌 44 症例に SDS を施行し、SDS 症例全体の再発後 Overall Survival (OS)、周術期合併症そして予後因子について後方視的検討を行った。

### 【結果】

SDS 症例全体の OS 中央値は 45 ヶ月だった。44 症例のうち 36 症例 (81.8%) は完全摘出できた。COMPLETE 群の OS は、NON-COMPLETE 群 (OPTIMAL 群と SUBOPTIMAL 群) に比べ優位に延長した ( $p$  値=0.027)。合併症は、6 症例に輸血を行ったが、その他重篤な合併症はなかった。再発後 OS に影響を及ぼす予後因子解析で有意差が認められたのは、DFI6 か月以上、完全摘出、摘出個数 2 個以下だった。

### 【考察】

DFI6 か月以上、摘出個数 2 個以下を満たす症例に complete surgery をすれば、さらに予後改善が期待できる可能性が示唆された。SDS は治療の一つであり、慎重に症例を選択すれば長期生存をもたらす可能性がある。